

時代が変わっても「自分」でいるために

能面師 ^{さかぐち}坂口(増山) ^{た え}多恵 氏(高校51期)

1999年 立川高校卒業
2003年 武蔵野美術大学 空間演出デザイン学科卒業
デザイナー勤務を経て2009年に京都へ移住。能面師・中村光江に師事。



■立高時代

教科書に沿って真面目に勉強する、いわゆる「優等生」だった中学までの私は、最初の間接試験で見事につまずきました。出題範囲“外”から出た問題に、まったく対応できなかったのです。さらに衝撃だったのは、それでもそれらの問題に答えられている同級生がいたことでした。そのとき、「枠の中だけで、できた気分になっていてはダメだ」と教えられました。

型にはまらない授業スタイルや、厳しさの中に垣間見えるユーモアで導いてくださった個性豊かな先生方との出会いは、私にとって本当に大きな出来事でした。

■能面師という道へ



能面・「瘦女(やせおんな)」の制作風景
写真提供 <https://naofukui.com/>

大学で舞台美術を学んだ後、舞台のセットデザイナーとしての道を歩みました。デザインという仕事はチームワークです。構想したのは私であっても、多くの人の手を経て、ようやく一つの作品が完成します。「最初から最後まで、自らの手で生み出すものづくり」に憧れを抱きはじめてから、私は能面に出会いました。

長い歴史を持つ『能』の世界と、能面の神秘的な魅力に惹かれ、終わりのない修行の道に足を踏み入れたのです。一つの角材をナタで割り、彫り、彩色を施す——その工程は、完成までに非常に長い時間を要します。作り方は600年前とほとんど変わっていません。スピードや効率化、合理主義、量産型という現代の流れとは真逆の世界。だからこそ能面は、これからの時代の変化にも耐えうる、世界に誇れる芸術なのだと、私は思うのです。

■理想と現実の狭間で

師匠のもとへ通いながら制作に励む日々は、刺激的で、喜びに満ちていました。そんな私も、結婚と出産を経て、また新たなステージへと進みました。家事と育児に追われる生活は、次第に私から「集中して制作に没頭できる時間」を奪っていきました。日々奔走すること十年。無理が祟り、心も身体も限界に近づいていました。「制作も私生活も両立してみせる」——そう信じていた私の理想は、静かに崩れ去っていったのです。

やっと立ち止まり、冷静に現状を見つめ直すことができたとき、私があらためて自分に問いかけたのは「何がしたいのか。何をすべきか。そして、何ができるのか。」ということでした。能面の中に感じた“時代に流されない価値”を、自分の中にも築き上げたい。それが、いまの私の人生のテーマです。

■在校生のみなさんへ

今、みなさんは立高という恵まれた環境にいます。「学ぶ」ことに自分の時間を費やせる今は、人生の中でもほんの限られた、かけがえのない時期です。どうか、その時間を惜しまず、たくさん学んでください。興味のあることはもちろん、あまり関心が持てないことにも、ほんの少し目を向けてみてください。思いがけないところで、それらがつながり、新しい発見へと導いてくれることがあります。そして、もしチャンスがあれば「体験」することも大切にしてほしいと思います。「学び」と「体験」は、やがて結び合い、いつか必ず生きてきます。点と点がつながり線となり、線が集まり面となるように、その積み重ねが、あなたの進む道をしっかりと支えてくれるでしょう。

みなさんのこれからの人生が、喜びと発見に満ちた、色彩豊かなものであることを心から願っています。